



児童教育実践についての研究助成

研究紹介ファイル 2024

vol.12

教科等横断型学習の開発



私たちは、この助成によって生まれた「縁」を大切に、
過去の助成研究の中からいくつかの研究をピックアップし、
応募に至るまでの背景や問題意識、その後の発展や新たに生まれた課題、
さらには研究の社会的意義についてもレポートしてまいります。
これから応募を検討されている皆さまに、
当財団が助成してきた幅広い研究分野を知っていただくとともに、
独自の視点で研究に挑む信念や研究成果を生み出すことへの情熱、
専門家としての誇りなどを感じていただければと思います。

公益財団法人
博報堂教育財団



これまでの研究紹介

★ 研究代表者の所属・役職は発行当時のものです。

2016.07.01 発行

vol.1 読み書き障害をかかえた子どもたち —
発達性ディスレクシア

File No.1 原 恵子 氏（上智大学 大学院言語科学研究所 准教授）

File No.2 奥村 智人 氏（大阪医科大学 LD センター 技術職員、オプトメトリスト）

File No.3 三盃 亜美 氏（大阪教育大学 教育学部 特別支援教育講座 講師）

File No.4 関 あゆみ 氏（北海道大学大学院 教育学研究院 准教授）

2016.10.01 発行

vol.2 読書を科学する

File No.5 猪原 敬介 氏（日本学術振興会 特別研究員 PD）

File No.6 常深 浩平 氏（いわき短期大学 幼児教育科 専任講師）

2017.07.01 発行

vol.3 進化する授業
— 子どもたちの思考を深め、理解力をはぐくむ授業とは —

File No.7 鈴木 一成 氏（東洋大学 文学部 教育学科 准教授）

File No.8 寺本 貴啓 氏（國學院大学 人間開発学部 初等教育学科 准教授）

2017.10.01 発行

vol.4 まばたきで言葉をつむぐ、手話で想いを伝える
— コミュニケーション支援 —

File No.9 鳥居 一平 氏（愛知工業大学 情報科学部 情報科学科 教授）

File No.10 武居 渡 氏（金沢大学 人間社会研究域 学校教育系 教授）

2018.07.01 発行

vol.5 “当事者”の思いに耳を傾ける
— 不安を解消し、健康的に過ごしていくための支援 —

File No.11 田部 絢子 氏（立命館大学 産業社会学部 准教授）

File No.12 涌水 理恵 氏（筑波大学 医学医療系 保健医療学域 発達支援看護学 准教授）

2018.10.01 発行

vol.6 日本語教育を考える
— 日本語非母語話者・児の視点から見えてくるもの —

File No.13 金 愛蘭 氏（広島大学 大学院教育学研究科 日本語教育学講座 准教授）

File No.14 櫻井 千穂 氏（同志社大学 日本語・日本文化教育センター 准教授）

2019.07.01 発行

vol.7 ことばの力
— ことばの力を育成する教育実践とは —

File No.15 高橋 薫 氏（早稲田大学 人間科学学術院 准教授）

File No.16 岸野 麻衣 氏（福井大学 連合教職大学院 准教授）

2020.10.01 発行

vol.8 「言語活動の充実」に寄与する授業実践
— 美術科と学校図書館の試み —

File No.17 臼井 昭子 氏（山形大学 産学連携准教授）

File No.18 桑田 てるみ 氏（国士舘大学 21世紀アジア学部 教授）

2022.03.01 発行

vol.9 実践をとおして掴む
— 障がい特性のある子どもたちの自助能力、主体性を育むために —

File No.19 堀 清和 氏（兵庫医科大学 公衆衛生学講座 研究員）

File No.20 藤井 裕士 氏（岡山県立岡山聾学校 幼稚部 教諭）

2022.10.01 発行

vol.10 聴覚障がい児への言語習得支援
— 英語音声の知覚・産出、漢字の読み書き —

File No.21 河合 裕美 氏（神田外語大学 児童英語教育研究センター 副センター長 准教授）

File No.22 茂木 成友 氏（東北福祉大学 教育学部 教育学科 講師）

2023.07.01 発行

vol.11 多文化共生へのアプローチ
— 外国にルーツをもつ子どもたち、家族への支援 —

File No.23 李 曉燕 氏（九州大学 共創学部 准教授）

File No.24 松井 かおり 氏（朝日大学 保健医療学部 健康スポーツ科学科 教授（英語教育）
留学生別科 別科長）

「研究紹介ファイル」バックナンバーは、当財団ホームページからもご覧いただけます。

<https://www.hakuhodofoundation.or.jp/>



教科等横断型学習の開発 ―― はじめに

人工知能AIの劇的な進化と普及により、
現在の価値観が大きく変革していくことは言うまでもないだろう。
予測しがたい未来を担う子どもたちの学びは、
これからどう変わっていけばよいのだろうか。

文部科学省は、新たな価値を創造し社会の創り手となる人材として必要な資質・能力の育成に向け、
各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に活かしていくための教科等横断的な学習を推進している。

教科等横断的な学習の推進に伴い「STEAM教育」の概念も広く知られるようになり、
教科連携や教科統合といった実践に取り組む学校現場も増えてきているようだ。

今回紹介する2本の研究は、STEAM教育や教科等横断型学習の萌芽時期の実践的研究だ。

“色”を切り口に各教科の連携学習をめざした「アート」×「ことば」
絵本の読み聞かせをきっかけに“ことば”の本質に気づかせる「日本語」×「英語」
教育現場における教科連携の方法や課題など、
読者にとっても学びになることが多い実践といえるのではないだろうか。



研究代表者

ふじい やすこ
藤井 康子氏大分大学 教育学部初等中等教育コース (美術)
准教授

第12回 研究助成

中学生期における「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習

[助成期間] 2017年4月～2018年3月

第12回 継続助成 (アドバンスステージ)【長期】

中学生期における「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習

[継続助成期間] 2018年8月～2020年3月

自尊感情こそが、学びに向かう意欲の源であり原点 生徒がふるさとに誇りを持てる実践をめざしました

美術教育がご専門の藤井さん。助成研究では、中学校美術科と国語科・理科などを連携させ、「地域の色」をテーマとした教科融合型学習^{*1}を開発した。日本ではまだSTEAM (Science Technology Engineering Arts Mathematics) 教育という概念が広く知られていなかった頃に提示した、天然色材を教科連携の結び目にする発想は、その後の藤井さんの研究手法のひとつになっているようだ。

背景にはどのような問題意識があったの

^{*1} 教科融合型学習：藤井さんが助成研究でこだわった独自の学習概念。藤井さんが考える「融合」とは、各教科の要素の粒がきちんと残ったままひとつに溶け合っているイメージ。STEAM教育も融合型学習だと考えているそうだ。

だろう。

「助成研究以前から、大分大学・大分県立美術館・大分県津久見市教育委員会・研究実践校が連携し『津久見プロジェクト』を組織して教科融合型学習モデルの開発に取り組んでいました。幼稚園・小学校での実践をベースに、中学校に発展させたものが助成研究になります。」

藤井さんによれば、当時は、従来の知識伝達型でなく、各教科での学びの関連づけや統合する方法を見出す力を育成する学習展開が学校現場に求められていたという。また、学びに向かう力や人間性の^{かんよう}涵養といった資質を育むことも教育現場の大きな課題だったそうだ。

一方、研究実践校である大分県津久見市

立A中学校の生徒には、ふたつの改善すべき課題があったという。

「ひとつめは語彙力についてです。自分の思いや考えを言葉でうまく表現できないことへの苛立ちや諦めの感情から、授業に集中できない生徒が少なくありませんでした。ふたつめは自尊感情や自己肯定感についてです。全国的に実施されている生徒対象のアンケート結果を見ると、自分が好きだとか、自分の可能性に希望を持てるという項目の数値が高くないことが目につきました。特に気になったのが“田舎で何もない”と口にする生徒が多かったことです。自分の生まれ育った土地に誇りを持ち、ふるさとの魅力を語れる大人になって欲しい、この点は学習プログラムを開発する上で大事にしたところですよ。」

まず藤井さんは、美術科が語彙力向上に資することができるのではないかと、との考えから、美術科と親和性の高い国語科との

【表1】開発プログラムの内容

1: その絵…どんな絵? / 身体的なアートと言葉のエクササイズ

導入にアンラーン (unlearn=学びほぐし) として実施。美術作品を見ていない人にどう伝えるかという課題を通して、視覚イメージを言語化する面白さと難しさをゲーム感覚で体験させる。

2: サイエンスレクチャー網代島巡見/美術×理科
津久見湾や網代島の地形、堆積岩 (チャート) の成り立ちや大地の働きについての講義を受けたあと、網代島で観察・スケッチ・岩石の採取を実施。



3-1: 津久見の色を表現する —— 岩石の色の整理と顔料作り/美術×国語

採取した岩石を色別に分類させ、色の幅や微妙な違いを感じとる。岩石から天然顔料をつくり、スケッチに彩色することを通して自然の色味の美しさを感じとる。



3-2: 津久見の色を表現する —— 顔料の色名の創作と色辞典の作成/美術×国語
国語科の古文で学ぶ日本の伝統色と関連させながら、ひとり2色、顔料を絵具にして色見本を作り色名を創作する。色名とその由来を記述し『津久見色辞典』にまとめる。

4: 移動美術館/美術×国語

大分県立美術館の所蔵作品26点を体育館に展示し、一日学芸員を体験させる。ふたり一組になって紹介作品を選択し、来館者に伝わる言葉で自分の見方や思いを表現するための発表内容を考える。

5: 鑑賞文を書こう/国語×美術

郷土作家の南壽敏夫氏作『朝』の実物を見て鑑賞文を書く。鑑賞前に教師から、作品解釈を言語化する観点を2点提示する。

観点1/美術科教師：色や形、モチーフやテクスチャー、大きさや素材などの視覚情報をとらえて言語化する。

観点2/国語科教師：作品の雰囲気や作品から感じられる感情、物語性など、非視覚情報を自分のイメージとしてとらえて言語化する。

6: 「アートと言葉新聞」を作る/国語×美術

ふるさと学習 (総合的な学習) での学び、郷土に関する学びを記事にして地域の魅力を地域へ向けて発信する。新聞記者をゲストティーチャーとして招き、読み手を意識した文章、見出しの役割などを学ぶ。

7: その絵…どんな絵? II / まとめ、振り返り

最初の学習を振り返り、絵を言葉にすること、伝えられた言葉から絵を頭の中で想像することを知る。想像した絵と実物を比べながら、同じ作品から多様なイメージを持つことができることを体感させる。

融合を開発プログラムの中心にすえた。「美術科には実技とともに、鑑賞の学習があります。美的体験から始まる学びを通して、美術教育が国語科の『書く力』の根幹である語彙力の向上にどのような影響を与えるか、実践を通して学習プロセスを見ていこうと考えました。」

津久見の自然に着目 見つけた色に名前をつける 体験的学習を実践

さらに藤井さんが着目したのが、津久見の自然環境だったという。

大分県南部に位置する津久見市は津久見湾の湾口部を囲うようにリアス海岸が見られる。津久見湾には宇宙塵が発見されたことで注目を集める網代島があり、干潮時には網代島の色とりどりの堆積岩（チャート）の層が見られるそう。また津久見は江戸時代から日本屈指の石灰岩の産地であり、地元には絵画技法のひとつであるフレスコ画^{*2}の歴史もあった。

「色をテーマにすることは『津久見プロジェクト』のディスカッションの中で出てきたアイデアです。小学校では児童に『ふるさとの色』を考えさせる実践を行いました。その時はタブレット上で作った色でしたが、色の素になる顔料には植物や岩石、貝や骨といった天然のものが多いことをヒントに、網代島の岩石から顔料を作って色に名前をつける、というプログラムを考案しました。A中学校にリアス海岸を見学する校外学習があり、理科には大地の成り立ちという単元があると知り、“色”でつなげれば面白い探究的学習になるだろうという手ごたえがありました。」

津久見市立A中学校の2年生91名を対象に約10か月かけて実践したプログラムが【表1】である。

「津久見プロジェクト」の連携機関からの支援もあり、非常に充実した内容になっているが、開発プログラムのねらいや効果について、藤井さんにいくつかのポイントを解説してもらった。

「導入部の『学びほぐし』は、生徒の固定概念や思い込みを崩し、正解はないのだと実感的に理解してもらうのがねらいです。絵を見て言葉で伝える人、絵を観察して客観的に記録する人、説明された言葉だけで絵

を想像する人に役割を分担します。同じ絵を見ても、同じ説明を聞いても、それぞれ感じ方やとらえ方が違うことを面白がったり、想像していた絵と実物の絵のズレを肯定的に受け止める生徒が多いという結果が出ました。」

自分自身の感覚や思考を働かせて独自の見方ができるようになるためのウォーミングアップ的な学習と言えそう。

「自分の考えや感じたことを表現する力を育む方法はいろいろあると思いますが、伝えたい事柄ができるからこそ伝えられるのではないかと思います。そこを子どもたちに持たせるのが結構難しい。それまで存在すら知らなかった網代島に足を運び、これだと思ふ岩石を持ち帰って乳鉢ですりつぶし顔料にして色名を考える。この一連の体験を通して得た知識は成長とともに変容しながらも蓄積されていき、生きていくために必要な知識として習得されていくのではないかと思います。網代島巡見から『津久見色辞典』を作るまでの活動が、開発プログラムの要だと思っています。」

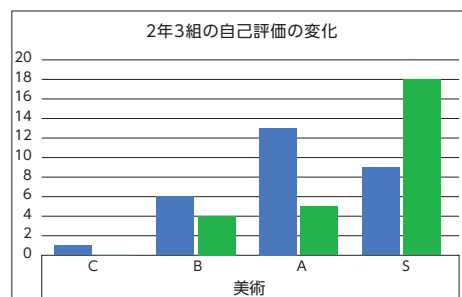
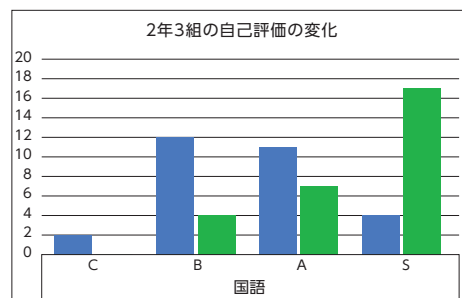
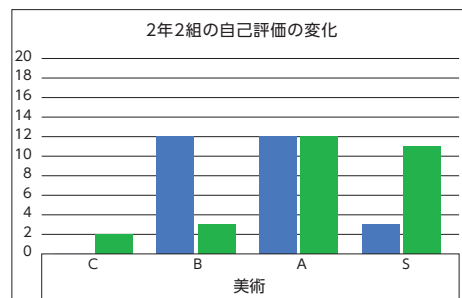
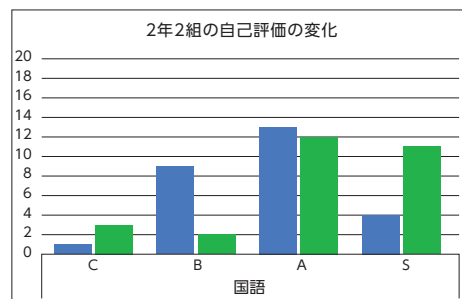
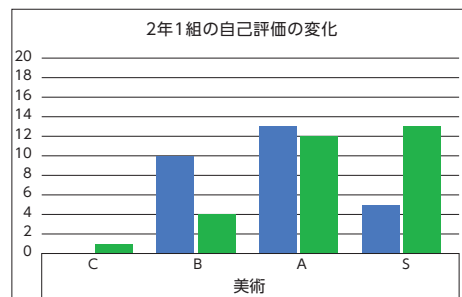
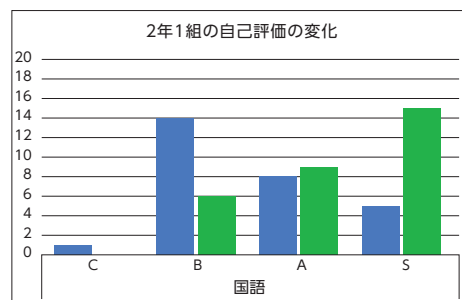
生徒たちの内側に、自分が見つけたこの色を伝えたいという主体的な動機を芽生えさせた体験学習と言えるだろう。

また、子どもたちに鑑賞させる作品が全て実物であることも、藤井さんがこだわった点で、「網代島や岩石も同じですが、実物でないと大きさや質感がわからないのです。」と言う。

移動美術館では作品の持つ雰囲気や気配といったものも感じとりながら思考力と想像力を働かせ、来館者や対話しながら学芸員をつとめる生徒たちの生き生きとした姿が見られたそうで、

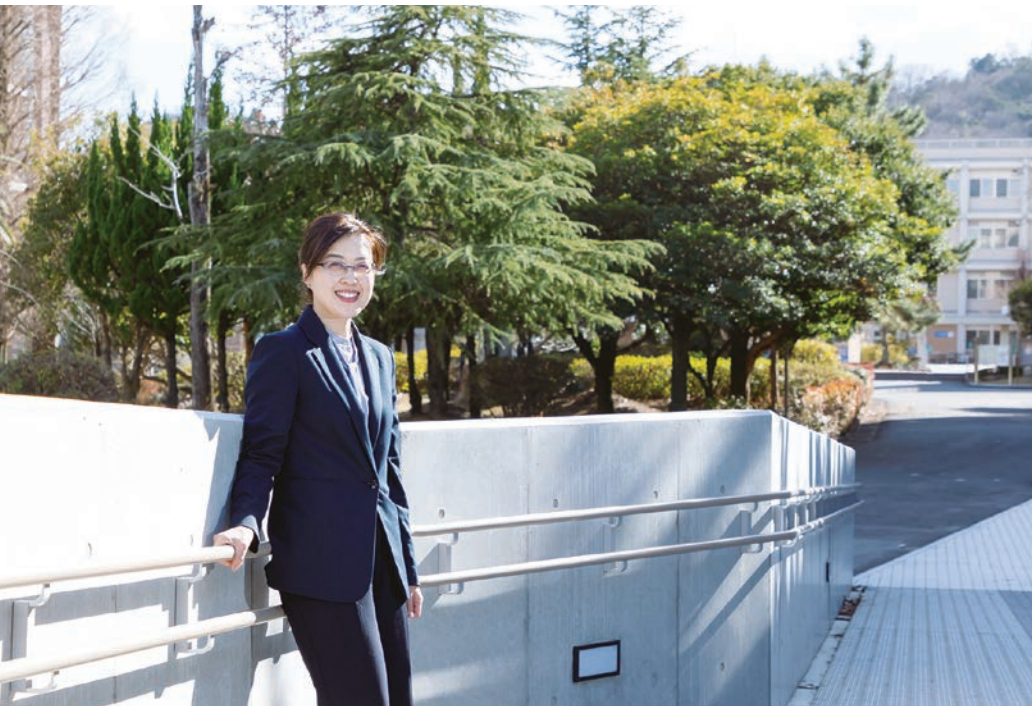
「研究成果としてビデオにまとめましたが、大人顔負けの表現力に驚きました。地域住民の方々や幼児、児童、高校生など、年齢に応じて説明表現を変える柔軟な対応もできていました。サイエンスレクチャーでの学びや顔料づくりの体験を交えながら説明している生徒を見かけたときは、嬉しかったですね。」

移動美術館の前後での生徒の自己評価（SABCの4段階）は国語科・美術科ともにB評価が半減しS評価が倍増した。また、郷土作家の作品の鑑賞文を書いた後、美術科で生徒たちに「授業を通して津久見の良さがわかったか」を自己評価させたところ、全クラスの70%以上がS、20%以上がAであった。これらの結果は開発プログラムが生徒の自己肯定感を高めることにつながったことを示唆している。【図1】



【図1】「移動美術館」実施前(青)と後(緑)の生徒の自己評価

^{*2} フレスコ画：壁に直接絵を描く絵画技法。壁に塗った漆喰が乾かないうちに石灰水で溶いた顔料で描く。石灰岩に含まれる炭酸カルシウムの性質を使って顔料を定着させる。



▲「融合型学習を通して、子どもたちの語彙が豊かになり、言葉の質が高まっていることを実証できるデータを積み重ねていきたいです。」

それでは、「アートと言葉」の学習体験を積み重ねていく生徒たちの語彙力はどう変化していったのだろう。

「計量テキスト分析を行って、鑑賞文や言葉新聞などの語彙数から語彙力を測ろうと考えていたのですが、実践をすすめていくうちに、量だけでは測れないことに気づいたのです。現場の先生方のあの手この手の指導スキルで語彙量は増やせるんですよね、さすがだなと。では、自分の実感のこもった言葉、言葉の質が大事だとなった時に、どう測ればいいのか悩みました。色名をつける活動など、言葉そのものを生み出す力をどう評価すべきか、継続助成研究での課題になりました。」

自己肯定感が高まり 学習意欲が高まった

継続助成では、『開発プログラム』をベースに学習内容を改善し、新しく英語科を融合させた教科融合型学習プログラムⅡを開発した。評価方法(教科融合型ルーブリック^{*3})の開発と生徒にもたらす変化や効果について明らかにすることを目的にした。

助成研究の実践校と同じ中学校の90名を対象に、1年生の2学期から3年生の3学期までの1年半をかけて『開発プログラム

Ⅱ』を実践。美術科×国語科×英語科の融合型学習において、美術科では絵画作品を制作し、国語科では津久見の美を伝える作文を、英語科では津久見の紹介文を書き、より国際的な学びを展開させた。修学旅行で訪れた京都では、外国人を相手に英語で津久見を紹介する活動も実施したそうだ。さらに、ふるさと津久見の魅力を国内外へ発信することを目的にした「津久見“美”事典」と『津久見“美”事典～作文・作品集』を作成した。

そして藤井さんは、3年超にわたる助成研究の結果と考察を次のようにまとめた。

1：生徒の自己肯定感の高まり(自己評価ルーブリック結果にみる評価の高さ)

- 各プログラム学習の後に実施した生徒の自己評価はS評価も見られるなど非常に高い傾向がみられた。
- ワークシートや振り返りシートの自由記述欄には「津久見は意外にすごいところ」「網代島で2億4000年前にすごいことが起こっていたんだなあ」など、生徒がふるさとの魅力を新たな視点から発見し、その土地への想いや愛着がさらに深まったことがわかる記述がみられた。

2：生徒の各教科に対する「学びに向かう力」の高まり(肯定的な意見や考え)

- 自己評価が比較的高い又は高い

生徒の記述の中には、「美術と理科が繋がったということをはじめて知りました」「色の見え方を(粒子の世界や身近な物理現象など)『理科の視点』というものから考えました」など、教科融合型学習に対する肯定的な感想がみられた。様々な学習体験が生徒の自己効力感を高め、生徒の中で様々な「見方・考え方」が生まれ、各教科への興味・関心が高まったことが、学習意欲にプラスの影響を与えた。授業に対する規律、努力、新たなことに挑戦する姿や集中して学習に取り組む姿がみられるようになった。

- 2019年度の学習アンケート調査の結果、「学校が楽しい」と答えた生徒は96%(2016年は73%)、「授業がわかりやすい」は93%(2016年は76%)、開発プログラムで積極的に取り入れたペアワークやグループワークの「学びあい」に対しては100%(2017年は87%)の生徒が肯定的にとらえていた。「学びに向かう力」に変化がみられた。

「生徒たちの反応は予想以上に良かったですね。それぞれの活動自体は面白がってくれらるだろうと思っていましたが、各教科に落とし込んでいくときには抵抗があるかもしれないと危惧していました。しかし生徒の中ではどの教科も自然につながっていて、授業後に感動したとか楽しかったと語ってくれるのに驚き、意外なほどでした。」

実物と触れ合うリアルな体験をきっかけに、学ぶ楽しさを実感した生徒たちの学習意欲が高まり、ひいては学校生活の満足度や自尊感情の高まりに良い影響を与えたといえそうだ。

「ですが、開発プログラムの効果は次の研究テーマになってしまいました。というのも、効果を測る教科融合型ルーブリックが完成せ



▲ 中学生期における「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習『開発プログラム』(左)、『開発プログラムⅡ』(右)

ず、いまでも課題として残っているのです。』

教科融合型学習は 教師を成長させる効果もある

教科融合型ルーブリックの開発が困難だった理由を、藤井さんは次のように話す。「そもそも融合型学習というものが今の日本の学校教育制度に入っていないが故の難しさだと実感的に気づきました。たとえば網代島の堆積岩のスケッチは理科の観察スケッチなのか美術なのか、しかし教科で切り分けた評価では融合型学習は評価できないのではないか——。

各教科の評価基準との整合性をはかりながら何度も試みましたが、完成にはいたりませんでした。』

しかし、その実感と試行錯誤の経験が、藤井さんにとっては大きな研究成果であり今につながっているようだ。

「STEAM教育もそうだと思うのですが、各教科の特性を理解していないと、総合的な学習の時間や特別活動で扱う内容との違いは何か、教育課程に取り入れる必要があるのか、など敬遠される要因になってしまうと思います。特に中学校では教科として成立していることが必須です。そこをクリアしながら実践をすすめる経験ができたおかげで、各教科が大事にしている教科内容を深く理解できたことは大きな成果です。」

また、効果という意味では、教科融合型学習は教師にとっても刺激的な学びになるのでは、と藤井さんは言う。「プログラムに参加してくれた教科の先生方だけでなく、学校全体で先生方の意識に変化がみられるようになってきました。」

研究実践校では全教職員に対して、教員同士による授業分析と協働的な学びあい学習の導入を推進したり、教科部会や研修による授業内容の振り返りを行い、授業改善に取り組んだという。

「研修に参加される先生方が相乗効果的に意欲的になっていくのを間近で見させていただきました。これからはSTEAM教育専門のコーディネーターの役割を担う教師の存在や、カリキュラムマネジメントも含め融合型学習を教育課程の中で推し進めていく知識やスキルが求められるようになるのではないかと思います。」

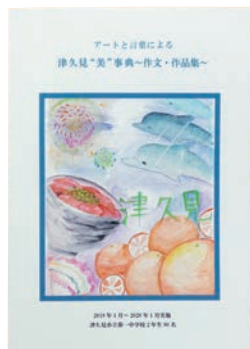
藤井さんは現在も継続して、公立小学校で実験的授業を実践しながら、教科融合型学習のプログラムを開発しているという。さらに、「助成研究では、津久見にある資源を活用することにこだわった実践を行いました。特

微的な地域資源がなくても可能なプログラムにするため、色から発想を拡げて光に注目しています。貝殻でランプシェードを作る活動を通して、『なぜ貝殻は光を一部透過するのだろう』という謎から学びへとつながっていく展開のプログラムです。今後も研究のパートナーになってくださる先生を探しながら、その先生が得意だったり好きな分野を活かせる融合型学習を協働で開発していきたいと思っています。いま一緒にやっ

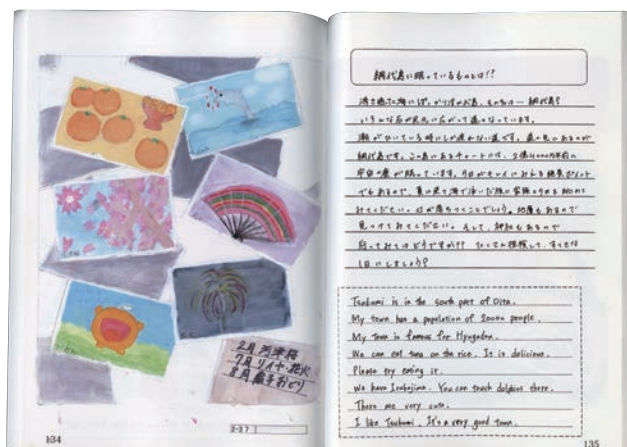
ている先生は美術がいちばん苦手な先生なんです。算数と音楽は得意だとおっしゃるので、じゃあ図工は私が受け持ちますので、算数と音楽の要素を入れられませんか、というふうにマニュアルのない授業づくりに協働で取り組んでいます。実際に授業を担当する現場の先生が楽しい、面白いと感じ生き生きとされる教育実践を続けていきたいと思っています。」



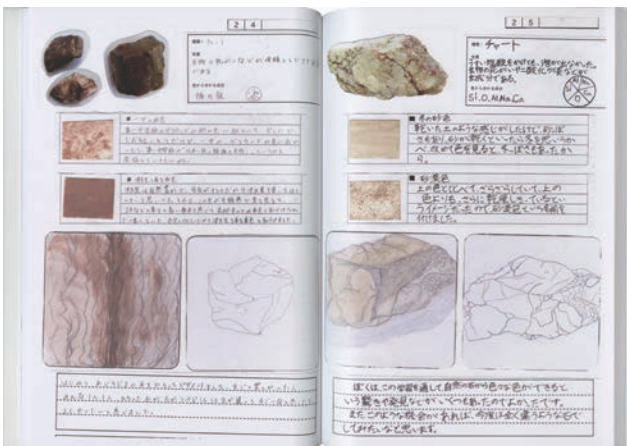
▲ 津久見色辞典



▲ 津久見“美”事典 ～作文・作品集～



▲ 津久見“美”事典



研究代表者

た な か ま ゆ み
田中 真由美氏

武庫川女子大学 文学部 英語グローバル学科
教授

第12回 研究助成

ことば科における絵本読み聞かせの 幼小接続モジュール・シラバスの開発

[助成期間] 2017年4月～2018年3月

絵本の読み聞かせを活用し、国語科と外国語活動を連携 ことばへの気づきを促す授業実践を積み重ねました

研究助成申請当時、田中さんは信州大学の教育学部に勤めていたようだ。

「2016年度から信州大学教育学部附属幼稚園、附属松本小学校・中学校が文部科学省の研究開発学校として幼小中一貫教育の推進プロジェクトをすすめていたのです。そのカリキュラムの中で小学校1年生から3年生を対象に新設された学びの4領域『ことば/科学/暮らし/表現』の『ことば領域』に着目した実践的研究を、附属学校の先生方と共同で行いました。」【図1】

「ことば領域」は①国語科の内容、②外国語活動の内容、③国語科と外国語活動の横断的内容、の三つから成っており、田中さんは③の横断的内容を扱う時間を「ことば科」と名づけた。「ことば科」では言葉の概念を英語や日本語など個別言語をさすのではなく、「コミュニケーションを行うための

意味、機能、仕組みを持った記号体系一般」と定義した。

「子どもたちが言語を学ぶとき、日本語は国語科で、英語は外国語活動や英語科の授業で、というふうに別の教科として学ぶ状況があると思います。ですが日本語にも英語にも言葉という大きなくりでは共通点があるだろうし、違いもある。そのことに気づいていくと、よりそれぞれの言語への学びが深まるのではないか、という考えから『ことば科』と呼ぶことにしました。」

さらに、
「『ことば科』の授業を通して、子どもたちが言葉に対して自覚的になっていくことがねらいでした。自覚的とは『ことばへの気づき』とも言うのですが、言葉の仕組みや働きを意識した上で言葉を使う力のことで、たとえば文法がそうです。英語と日本語で

は言葉の並び方が違い日本語の順番で英語に置き換えるだけでは通じないのだと気づく。似ているところと違ってるところを比較しながら言葉を学んでいくことで、自覚的に言葉を使う力を母語でも外国語でもつけさせたい、と思いました。」

実は「ことば科」には、英語教育の分野で注目されているCLIL^{*1}の視点が含まれ、田中さん自身もそれを意識していたようだ。

^{*1} Content and Language Integrated Learningの略。教科科目・テーマの内容(content)の学習と外国語(language)の学習を組み合わせた学習(指導)の総称で、日本では「クリル」あるいは「内容言語統合型学習」と呼ばれている。英語を使って算数や理科などの教科を学ぶ指導が含まれる。

日本語も英語も一緒に学べる 「ことば科」の授業を考案

田中さんが絵本の活用を考えた理由は、附属幼稚園と附属松本小学校の両方で、絵本の読み聞かせが継続的に行われており、絵本が子どもたちの身近な存在だったことが大きかったという。

「幼小中一貫カリキュラムにおける、幼稚園の『遊びの学び化』と、小学校1～3年生の『ことばの領域』をつなぐもの、接続を媒介するものは何かと考えたときに、絵本だなと気づいたのです。附属松本小学校でずっと大事にされてきた絵本の読み聞かせを活かしたのは良かったと思います。」

教科等横断型の学習内容を検討する際には、すでに学校で実施されている活動や教育課程に落とし込んでいくのがスムーズに受け入れてもらえるポイントと言えるのかもしれない。

また、外国語教育における絵本の読み聞かせに関する先行研究によれば、子どもは視覚や聴覚を働かせながら、自分がすでに



【図1】「学びの総合化」による幼小中一貫カリキュラム
(信州大学教育学部研究論集 第10号 宮崎他, 2017)

持っている言葉の働きについての知識や世間の常識を手がかりにリスニング・スキルや集中力を高めることができると考えられているようだ。

「絵が聞くことの助けになるのです。聞くだけでは理解できないことも、絵を見て推測したり想像したりすることで、内容理解が深まります。視覚情報を得られる絵本は英語の学習にとっても向いていると思います。」

そこで田中さんは、絵本の読み聞かせを活用して日本語と英語を一緒に学べる「ことば科」の授業を考案し、幼小中一貫カリキュラムの「幼稚園における遊びの学び化」とも関連させた、「ことば科」のシラバス作成を目的に助成研究に取り組んだ。

まず絵本の選定に着手し、絵本を用いて何を、どのように、どのような順で指導・評価するかを考えるため、①教育内容の整理と②指導・評価法の開発は、ともに実践を通して通年で行い、これらの結果を踏まえ年度末に③教育計画を考案することにした。

授業実践の対象は信州大学附属幼稚園の年中と年長の各学年1クラス、松本小学校の1～3学年の各学年1クラスとし、実践後に幼児の発言・行動・振り返りシートなどを観察して、言葉の意味、仕組み、働きに関する気づきがあるかどうかを評価した。

絵本の選定や授業内容の考案は、幼稚園担任教諭、小学校担任教諭、小学校英語専科教員（日本人）、小学校ALT（Assistant Language Teacher オランダ人）などとチームを組んで実施した。

実践し内容を振り返りながら 授業内容を練る

研究内容や方法、結果や考察について、具体的に実践の様子を示しながら見ていこう。

教育内容の整理/ 絵本（日本語・英語）の選定

「ことばへの気づき」を意識した絵本選定ポイントは「日本語と英語の意味、仕組み、働きの相違点や類似点に気づかせることが可能かどうか」とした。また、幼小接続を意識して①物語の展開の予測が容易であるか、②表現の繰り返しがあるか、③想像力をかきたてられるか、もポイントとした。

結果、日本語の絵本11タイトル、英語の絵本21タイトルを選び、タイトルやあらすじ、読み聞かせポイントなどをリスト化した「ことばの教育のための読み聞かせ絵本のデータベース」を作成した。

「読んでみないと内容がわからないので、選定は結構大変でした。」授業内容を考えてからふさわしい絵本を探すこともあれば、これはと思う絵本ありきの授業展開を考える場合もあったそうで「最終的には言葉が少ないもの、子どもたちが日本語ですでに読んだことのあるもの——たとえば『大きなかぶ』など——を中心に厳選しました。」

小学生向けの英語の絵本には、YesとNoだけしか使われていないもの、アルファベットのABCしか書かれていないものなども選ばれた。

附属幼稚園での実践

「附属幼稚園では絵本の読み聞かせはお迎えを待つ退園前の時間を使って行われていました。その時間帯に、幼稚園教諭による日本語の絵本の読み聞かせ、小学校のALTによる英語の絵本の読み聞かせを実施することにしました。」

英語の絵本『Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?』の読み聞かせの特徴は、動物の名前が2回繰り返されたあとに“What Do You See?”と幼児に対して問いかけが繰り返されること。幼児たちはALTと一緒にリズムカルに表現を繰り返したり、問いかけに対する答えを予測したり、絵を見て英語や日本語で動物の名前を答えたりできる。

ALTと一緒に動物の名前を英語で繰り返したり、問いかけに対する友だちの“Zebra”という発話を真似したりする子や、読み進めるにつれて次の動物が気になりALTより先に次のページの繰り返しフレーズをつぶやく幼児の姿などが観察された。

「“What Do You See?”と言いながら先生がおでこに手をかざして何かを見るような動作をすると子どもたちも動作を真似ながら“What Do You See?”と繰り返すのですが、どういう意味の英語なのかわかっていないのではないかと指導した先生はおっしゃっていました。でもそれでいいよね、と。リズムと音と体で覚えたことが後になって、そういう意味だったのかと気づくことがあれば十分なのです。」

日本語の絵本の読み聞かせでは、繰り返し使用している絵本であるにもかかわらず、毎回子どもたちが初めて聞いたかのように驚いたり喜んだりする姿が見られたという。「友だちと一緒に、楽しい気持ちや内容の面白さを共有したり再確認したりしているのだと考えました。」

繰り返し使用されている日本語の絵本の英語版を小学校の授業で使用することで、幼小を接続し遊びを学びへとつなげる可能性がありそうだ。

附属松本小学校での実践



▲ ALTに絵本を読み聞かせてもらう小学校の児童たち

小学校では日本語と英語の相違点や類似点に気づかせることを目的に、反対言葉・否定語・オノマトペ・注意や叱責などの表現が特徴的な英語の絵本を選定した。

授業は主に日本人の英語専科教員とALTがチーム・ティーチングで行い、授業によっては学級担任教諭も参加した。

指導方法には、先行研究によって提示されている読み聞かせのモデルを使用し、指導モデルに沿って「計画(Plan)」「実行(Do)」「反省(Review)」の3段階の流れで実施した。

『No, David!』（注意や叱責、同意等の表現）を用いて小学校1年生で行った授業の一場面が【表1】だ。

「計画(Plan)」では、絵本の表紙を用いた導入を行った。表紙に描かれたDavidの母親の表情を想像させ（絵本にはDavidの母親の顔は一切描かれていない）、どのような状況であるかを児童たちに考えさせる活動を行った。

「実行(Do)」の実際の読み聞かせ授業では、注意したり叱ったりする時の表情や口調、言い方など、言語の使用場面と機能について考えさせ気づかせるために、自分や身近な人ならどう注意するかと児童に問いを投げかけ、絵本のコミュニケーションの場面を児童それぞれにとって身近な場面へと転換させている。

先行研究によれば、教室内の交流を重視する「交流型読み聞かせ」の手法が注目されているようだ。数ページ読み聞かせを行った後で少し立ち止まり、内容について予測したことや理解したことをクラスの友人と話しあって様々な読み方に触れさせたり、教師の問いかけに対する答えを考えさせたりすることで、理解を深める機会を子どもに

与えることができるという。

反省 (Review) では、『No, David!』を読み終わったあと、自分が叱られた時の場面を児童たちに思い出させ、誰がどのような口調で何と言ったかを引き出し、絵本のDavidの母親なら英語でどのように言うと思うか考えさせる活動を班ごとに行わせた。

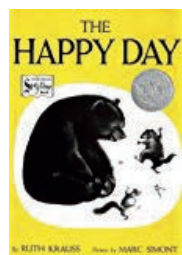
その結果、声の大きさに注意の度合いの差がわかる——「大きいでっかい声のNoと中くらいのNo、(あまり悪くないときは)小さいNo」——と考えた児童がいた。「Yesはハイ、Noはイエエという英単語の意味を学ぶ授業ではありません。同じ言葉でも状況によって声音や強弱が違い、それによって意味も違ってくることに子どもたちは気づいていました。絵本の最後にDavidのお母さんが初めて『Yes, David!』と言うのですが、どんな気持ちで言っているのかな?と問うと、『いいんだよ』とか『大丈夫だよ』と優しい言葉に子どもたちなりに変換されていました。YesとNoしか出てこない絵本ですが、とても深い言葉の学びができたと思います。」

評価

学習評価の観点とは、①自己表現力：児童の内にあるものを他者に表現する力、②課題探究力：児童自らが求めるものを追究する力、③社会参画力：ある目的に向かって他者と協働して創造する力、の3観点とした。これらは幼小中一貫教育の推進プロジェクトにおける評価の観点である。

具体的に『No, David!』の単元における評価基準は次のとおりだ。

- ①自己表現力：絵本の読み聞かせから感じたYesやNoの意味を自分の言葉で友だちやALTに伝えようとしているか。「発言はもちろん、つぶやきや動作も入ってきます。(田中さん)」
- ②課題探究力：強く“No”と言う場合や、低く冷静に“No”と言う場合など、声の強弱や高低の理由を絵本の内容から推測して



▲ 著者：Ruth Krauss
出版社：HarperCollins



▲ 訳者：きじま はじめ
出版社：福音館書店

【表1】読み聞かせ中の活動 (No David!)

話 者	発 話
専科教員	(絵本の途中で止めて)ここまで読んでもらったけれど、なんて言葉が出てきた?
児童たち	(叫びながら) No!
専科教員	ダメな人? (挙手をさせる) みんなだったらDavidにどんな風に言う?
児童たち	(何人かが口々に何度も) No!
児 童 E	(手を×の形に交差させて) No, no, no, no.
専科教員	みんなだったらなんて言う?
児童たち	(何人かが口々に何度も) No.
児 童 F	うちの妹みたい。
専科教員	Your sister like this? Fさんこういう時なんて言う?
児 童 F	いけないことはいけないでしょ。
専科教員	いけないことはいけないでしょって言う。 (しばらく絵本の絵について児童が話をする。)
専科教員	(Davidがいたずらしている絵を見せながら) これはどう?
児 童 E	Yes, Yes. うちではYes。
専科教員	Noって言う人? (挙手をさせる。)
児童たち	(半数が挙手する。)
専科教員	じゃあ、DavidにNoって言うてみようか。
児童たち	(全員で) No!
専科教員	今友達として注意してくれたと思うんだけど、(Davidがいたずらをしている絵を見せながら) もしxx先生(担任)がこんな見たら何て言うと思う?
児 童 G	こらー。

答えようとしているか。

- ③社会参画力：状況や人間関係によって同じ単語でも様々な意味合いと表現方法があることに気づき、その表現方法の違いを受け入れているかどうか。「さらに、言葉の面白さや特徴を自分一人で理解しているのではなく、友だちと共有している、他者と関わりながら学ぶことができる、といった観点も含まれます。(田中さん)」

ことばへの気づき

3年生の授業では、同じ内容の絵本を日本語と英語で読み聞かせ、それぞれの言語における様々な表現を考えさせる活動を行った。

『The Happy Day』と翻訳版『はなをくんくん』、バイリンガル絵本『Where Are You Going? To See My Friend! / どこに行くの? ともだちにあいに!』(左からめくるページは英語で、右側からめくるページは日本語で書かれている)を使用した授業後の児童の振り返りシートから児童の「ことばへの気づき」を考察した。

『The Happy Day』は冬眠から目覚めた動物たちが春の匂いがする方向へ走って行くというストーリー。英語のrunやsniffなど動物の動作を表す単語が日本語ではどのような表現になるかを、動物の絵と照らしあわせて考える活動を行った。振り返りシートには次のような記述がみられた。

[チョコチョコやドスドスという動作の様子]の言葉で走っている様子などがわかって面白かった [ササササササだけでも読み方を

変えると、ゆっくりだとおそーい感じになったり、早く読むと小さい動物が走っているみたいで面白いと思いました] など、動作を表す日本語の表現や音の多様さを [面白い] [楽しい] [良かった] と感じた児童が約8割いた。

『Where Are You Going? To See My Friend! / どこに行くの? ともだちにあいに!』は、動物の鳴き声の表現方法が言語によって違うことを [面白い] [驚いた] と感じたり、違いに気づいたとハッキリ記述した児童が約半数おり、[ほかにもいろいろな鳴き声を調べたいと思った(ほかの国の)] と学習意欲を示した児童が26.5%いた。

さらに、[私は羊がメーメーと鳴くと思っていたけど外国などでは、パーバと鳴くことがわかったので意識して聞いてみたら、どっちも混じったように聞こえて、不思議だなと思いました。多分メーメーと鳴くと思うとそう聞こえるだけなんだと思いました] など音の認識に関する自分なりの考えを書いた児童が23.5%いた。

また、年度末に小学校3年生の実践クラスを対象に行ったアンケートの結果、日本語の絵本の読み聞かせが好きな理由に [いろいろなことを知ることができる]、英語の絵本の読み聞かせが好きな理由に [英語の勉強になる] との回答があった。

以上の結果から田中さんは「日本語と英語の読み聞かせを継続的に行ったクラスの児童たちの中には、絵本の読み聞かせを楽しむだけでなく、言葉の特徴を分析的にとらえようとしたり、言葉の学習に意欲を示したり、自ら言葉を学ぶための活動ととらえている児童がいることが明らかに

【表2】1学年のシラバス (H29年度末作成・H30年度実施)

学期	単 元 名	単 元 目 標	教 材
1	数に親しもう (4時間)	・絵本の読み聞かせを聞いて、お話の内容を推測したり、絵本に関わる質問に答えたりしようとする。 ・日本語と英語で動物の数え方を比べ、それぞれの言語の良さや難しさに気づく。 ・1～10までの数の言い方に慣れ親しむ。	5 Little Apples Ten, Nine, Eight
2	ぼくのYes わたしのYes (2時間)	・絵本の読み聞かせを聞いて、注意されるときに英語ではどのように注意するのかを日本語と比べて考えようとする。 ・自分の生活の中で注意されるときにはどのように注意されるのか英語で表現しようとする。 ・話者の関係によって同じ単語でも異なった意味や言い方になることに気づく。	No, David! Yes
3	日本と世界の食べ物 (2時間)	・日本の食べ物や文化について、ALTに聞いたり言ったりしようとする。 ・食感や味覚に対して自分の持つ食べ物のイメージを友だちや先生と共有する。 ・絵本の読み聞かせを聞いて語彙の意味を推測しながら、絵本に関わる質問を聞いて答えようとする。 ・日本語と英語の「掛け声」の表現の違いを楽しんだり、お話の続きを想像したりする。 ・今まで知らなかった英語の表現に親しみながら、自国と他国の食文化に目を向けている。	The Gigantic Turnip

【表3】シラバスの検証

修正前			修正後		
1-1	数に親しもう	5 Little Apples Ten, Nine, Eight	1-1	みんなであいさつをしよう	Excuse Me
1-2	ぼくのYes わたしのYes	No, David ! Yes	1-2	ぼくのYes わたしのYes	No, David ! Yes 「やだ」
1-3	日本と世界の食べ物	The Gigantic Turnip	1-3	日本と世界の食べ物	The Gigantic Turnip
2-1	みんなであいさつをしよう	Excuse Me	2-1	数に親しもう	5 Little Apples 「かずの絵本」
2-2	はなたいことば	「さかさのこもりくん」 Eric Carle's Opposites	2-2	はなたいことば	「さかさのこもりくん」 Eric Carle's Opposites
2-3	アルファベットであそぼう	Museum ABC	2-3	どうぶつたちの走り方	The Happy Day
3-1	オリジナル歌詞を作って 楽しもう	Today is Monday	3-1	比べてみよう動物の鳴き声	Where Are You Going? To See My Friend! どこにいくの? ともだちにあい!こ!
3-2	色の表現を楽しもう	My Crayons Talk 「22の色」	3-2	色の表現を楽しもう	My Crayons Talk 「22の色」
3-3	比べてみよう動物の鳴き声	Where Are You Going? To See My Friend!	3-3	アルファベットであそぼう	Museum ABC

なった」とし、実践事例と結果を基にシラバスを完成させた。【表2】

文化への気づきを促す 絵本の読み聞かせ研究を継続中

翌年、田中さんは作成したシラバスに沿った「ことば科」の授業を行い、シラバスの内容を検証するため、年度末に児童を対象としたアンケート調査(選んだ絵本が教材として適切であったかどうか)を実施した。さらに授業実践者(外国語専科教師・ALT)と授業観察者(研究チームメンバー4名)でシラバスの振り返り(ことばへの気づきを促すシラバスであったか)を行った。

児童へのアンケートの結果、「英語の絵本の読み聞かせが好きか」の質問に「いいえ」と答えた割合が多かった2年生の教材選定を再検討した。反省点として選定絵本が物語性に乏しかったことが挙げられ、さらに児童の発達段階や他教科の学習進度に応じた再編成の必要性も検討し、【表3】のようにシラバスを修正した。

勤務先が変わり、兵庫から長野へ出向いで授業考案や実践アドバイス、授業観察・参加は大変だったようだが、助成研究の発

展形として、現在も田中さんは小学生を対象に絵本の読み聞かせの研究を継続しているそうだ。

「公立小学校の外国語活動の時間を使って、実際に私が授業をさせてもらい、その時のデータを取っているところです。2018年から始めたのですがコロナで中断してしまい、現在も継続中です。助成研究では言葉に焦点を当てましたが、今はもう少し文化に焦点を当てています。もちろん言葉にも文化は表れてくるのですが、絵やイラスト表現にも国による文化の違いを見ることができ、物語の内容にも文化の違いがあります。言葉と文化への気づきを促す英語絵本のクリティカルリーディングの指導法を開発したいと考えています。」続けて、「助成研究で、子どもたちがあれほど言葉に気づけるのだとわかりました。では大学生に対して物語=小説を使ってどんな気づきがうまれるのか、という研究にも着手しています。英語文学テキストを用いて、文学の時間でなく英語のリーディングの時間の中で、言葉や文化の違いを批判的に読んでいこうという実践的な研究です。いずれはwriting研究にもつながりたいと思っています。

読むことと書くことを組み合わせたほうがよりことばへの気づきは深まると考えていますので、助成研究での実践を、そういう流れにつなげていきたいですね。」



▲「博報堂教育財団のHPを見たという小学校教諭の方から連絡をいただき、つながることができました。絵本の相談から始まり、今は教師の成長に関する研究を一緒にできないかと話しています。」



当研究助成への応募について

「児童教育実践についての研究助成」は2005年に「博報『ことばと文化・教育』研究助成」としてスタートして以来、多様な研究を助成してきました。これからも、ことばの教育と実践の研究を支援し、教育の質の向上につなげてまいります。皆さまからのご応募をお待ちしております。

【対象となる研究】

●「ことばの力」を育む研究

- 国語・日本語教育の諸分野における研究
- あらゆる学びの場におけることばの教育に関する研究

●児童教育実践の質を向上させる研究

- 多様な場における教育実践の質を向上させる研究

※対象は小・中学生となります。ただし、児童教育への反映が明確な場合に限り、幼児教育、高校生に関する研究も可とします。

【応募資格】

下記のいずれかに該当する方を対象とします。

●日本の学校・教育委員会に所属する教育実践に携わる方

(例えば教諭、指導主事、相談員、特別支援教育の支援員等。)

●日本の大学・研究機関に所属する研究者

(例えば准教授、講師、助教、博士課程の院生等。若手支援のため、教授やそれに相当する職は除く。)

【助成期間】

●1年間または2年間とします。

応募時に選択のうえ、申請してください。

【助成金額】

●1ヵ年助成……1件につき200万円を限度に助成します。

●2ヵ年助成……1件につき300万円を限度に助成します。

● 詳しくは当財団ホームページをご覧ください ●

<https://www.hakuhodofoundation.or.jp/>

博報堂教育財団は、児童に対する国語教育と視覚・聴覚障がい者に対する教育を助成し、

あわせてその活動に関する調査研究を行うことで、

健全な人間形成に寄与することを目的に、1970年に設立されました。

以降、「子ども・ことば・教育」を活動領域ととらえ、さまざまな活動を行っています。

50回を超える開催となっている優れた教育実践活動を顕彰する「博報賞」をはじめ

「児童教育実践についての研究助成」「教職育成奨学金」に加え、

「海外の子どもたちの日本語教育支援」「世界の子どもたちとの日本語交流」「社会啓発事業」

さらに「こども研究所」などの活動を行っています。

公益財団法人 博報堂教育財団

〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 14階 Tel 03-6206-6266 Fax 03-6206-6582

www.hakuhodofoundation.or.jp

博報堂教育財団

検索

「研究紹介ファイル」は当財団ホームページからもご覧いただけます。

© 公益財団法人 博報堂教育財団

2024. 07. 01